

のみ建築を知るとというのは、かなり危険な要素も含みこむことにもなりかねない。現実には存在する建築が言語によって抽象化され、レトリックでのみ、その良し悪しが語られるということは、本物を知らずに概念だけが一人歩きをしているということにほかならない。建築の書生談義はおおむねこのようなものだが、だんだんと建築の良さがわかってくと、達人の味覚の喜びにも似た気持ちが満ち溢れてくるのである。

そんなときにお薦めしたいのが、平松剛の著になる『光の教会—安藤忠雄の現場』である。若い著者による建築家の記録であるが、対象が、いまや世界の寵児となった建築家安藤忠雄であり、強い個性をもつ安藤の手でひとつの作品が実現にいたるプロセスを実に細かく記している。完成後「光の教会」と名づけられたこの建築が、どのような経緯で建設が構想され、設計、施工されていくかをつぶさに追った迫真のドキュメンタリーである。

この書の良さは、何よりも建築をつくるにはこんなに大変でこんなに人間的なのだ、ということを示して見せたという点にある。「建築」という行為に対し、ノンフィクションの手法で肉迫し、そこに登場する人々の人間模様を鋭い観察眼で描ききることに成功した。クライアント、つまり建築主がこうした建築をつくりたいとの構想を抱き、ひとりの建築家にめぐりあい、予算や工期、さらにはデザインをめぐる双方が激しいやり取りをしていく様が、あたかもドラマを見るように具体的に描き出されているのである。

「光の教会」は大阪府茨木市に建設されたプロテスタントの教会で、それまでの古い木造の教会を建て替えることになり、1987年から2年間をかけて打ち放しコンクリートの新教会を建設した。「金はないけれども、安藤さんなら何とかなる」ほとんどこのような発想で新聞記者でもある教会役員が安藤事務所と連絡を取り、そこからすこぶる人間くさいドラマが生まれていくのである。通常の1/3の予算から話が始まる場所もすごい、それを引き受けて本当に造ってしまうところもなかなかのものである。

本書の筆者は、建築の構造を学び、実務の経験を積んだ人間で、その点が本書の魅力に大いに貢献している。安藤流の美しいコンクリートの仕上げはどのようなやり方でできあがるのか、そもそも鉄筋コンクリートの建築はどのように施工していくのか、現場担当と施工会社との関係はどのようなものか、建築法規はどのようにかわってくるのか、といった内容が、話の展開とともに随所に散りばめられ、製図版の上(当時はまだ製図版で仕事をしていた!)で生まれた図面が現場でどのように生きるのかが手でとるようにわかるようになっている。

もちろん、この書の狙いは技術論に終始することではなく、「閃き」から始まる安藤忠雄のデザインがいかにかに具体化され、幾多の問題を解決しながら、作品として実現していくかをつまびらかにするところにある。さりげない情景描写を巧みに積み重ねることで、やりとりの背後に隠された激しくも人間的な思想があらわになってくる。それにしても、役所に媚びず、市井の人々と生き生きとしたコミュニケーションを保ちながら建築に生きる安藤忠雄の自由な姿勢は、まことに気持ちが良い。

この本は古典の書でもなければ、教科書的な教訓めいたものでもない。ノンフィクションとして気楽に読んでいただければ十分であるが、そこから得るものは大きい。筆者はこの書でデビューした後、時間をかけて次の本の構想を練っているという。つまら

ない本の多い建築書の世界のなかで、丹念な取材と推敲を繰り返した文章が何とも魅力的である。

## 他のものでは代えられない住まい

在塚礼子

埼玉大学教授

## 『建築計画学への試み』

吉武泰水 著

鹿島出版会

ISBN430603223X

1987

人間と空間、生活と空間との深い結びつきを伝える本を選びたい。

“まだ見ぬ本”はどうだろう。今年の5月に急逝された吉武泰水先生が完成を目前にしておられたという本である。3冊か5冊つくって、まわし読みしてもらおうのいい、と話しておられたとか。でも近く刊行されるようなので、それを楽しみに、ここでは『建築計画学への試み』を選ぼう。これは書いた人の顔が見える本である。ひとりの人の思考のプロセスが伝わる本がいいと思う。

この本は、著者が“建築施設を主に使う人を主体として、そこでの生活や営みを見つめ考え、それを建築施設の計画に反映させる”ことを念頭に置いて続けてこられた研究生活の三つの時代に対応して、3部構成になっている。

第1部(建築計画学の生い立ちと展開)は東京大学での最終講義にあたる特別講義の記録である。オーソドックスな建築計画学の創成期のエッセンスが、住宅、学校、病院、図書館という、いわゆる建物種別に語られている。施設を語るごとに、それが住まいから生まれたものであることを述べておられるのが印象深い。話し言葉で語られていることが、きっと理解を助けてくれるだろう。

第2部(いくつかの小論)は主として病院について、その後の時々の思考が綴られている。

そして第3部(いくつかの試論)。実は若い人たちにとくに読んでほしいのはここで、これらの試論にはお会いするたびにみずみずしかった先生らしさが満ちている。おひとりで新しいテーマと取り組み、その成果を建築学会支部研究会で発表されたのが65歳から70歳にかけてであったことになる。

小説も、夢も、建築について考える材料は、目を開けてみれば、どこにでも待ち受けている。確かな目的を持って先人の最上の思考を捉え、確かな事実を把握し、それを表現しながら思考を組み立てていく、その試みのプロセスは、若い人を勇気づけるに違いない。

私まぎれもなく初学者であったころ、老人にかかわる建築の研究をしたいと思い、でもそのころの老人問題は深刻で、建築以

### 建築計画学への試み

吉武泰水

鹿島出版会

前にもっと重要な問題があると思知らされている、と先生にお話ししたことがあった。先生はなににでも誰にでもするように、まず私にも理解を示してくださった後、「それでも、安心できる住まいは他のものには代え難いものだ」と(いう意味のことを)おっしゃった。

第3章に取り上げられているのは、小説「老舎」の住まいにしても、ご自身の夢にしても、ただひとつの事例である。ひとつの事例から、なにものにも代えられないかけがえのない住まいと人の心のかかわりが捉えられている。

5月の告別式で、先生がお好きだったという良寛の歌が紹介された。“やまかげの岩間をつたふ苔水の かすかにわれはすみわたるかも”まさしくこれは、私が住居学の最初の授業で、“住む”は“澄む”であることを話しつつ、必ず学生たちに伝える歌であった。

カテドラルの片隅で、久しぶりに先生と対話ができたと気がした。

この本で、若い人たちが先生と対話してくれるといいと思う。

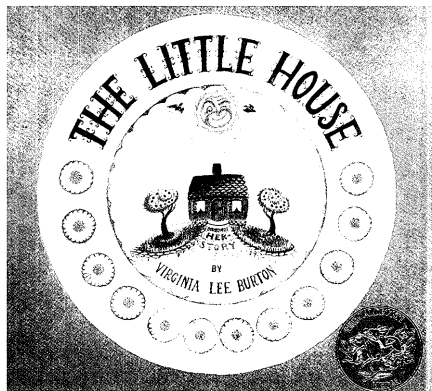
## 心のどこかに「ちいさいおうち」を

藤本信義

宇都宮大学教授

### 『ちいさいおうち』

バージニア・  
リー・  
パートン 著  
いしいももこ 訳  
岩波書店  
ISBN4001105535  
1954



『ちいさいおうち』  
という絵本、あなた  
が子どものころ

に読んだかもしれない。読んだとしても、長じて今建築の入り口に立っているのなら、読み直すのに半時間もあれば充分、あらためて手にしてほしい一冊である。読んだことがなければなおさらお薦めしたい。ちいさくとも「おうち」だから立派な建築書であると同時に、建築を取り巻く街や田舎の環境に思いを深めることのできるロング・セラーである。どのぐらいロングかというと、作者バージニア・リー・パートンがこの絵本を出版したのは1942年、33歳のときである。岩波書店から翻訳本の初版が刊行されたのは1954年、筆者の手元にあるのは1968年版ですでに13刷目であるから、さらに35年後の今の程度版を重ねているのだろうか。

のどかな田舎の小さい家。四季折々の美しい田園風景を楽しんでいた小さい家の近くに、ある日馬車とは似ても似つかない自動車が入ってくる。ときとともに商店や工場が周りにできて、鉄道が走り高いビルがつくられ、地下鉄も走るようになる。小さい家はみすばらしくなって住む人もなくなる。しかしある春の朝に小さい家の前を通りかかった女の人が、この家をまた田舎の小高い丘の上に移築して蘇らせるという、単純なお話である。

『ちいさいおうち』の感想をネット検索すると、ハッピーエンドで良かった、やはり田舎の良さを大切にしたいというのが比較的多い。建築の入り口に立つあなたの感想はどうか、ここが問題。出版から60年を経てなおこの絵本が多くの人々に読まれているのは、優しい語り口とすてきな絵を通して、作者は20世紀都市の発展のしかたに疑問を呈しながら、人間本来の暮らしを温かく見つめているからではないかと思う。

作者の10代から20代にかけて、自動車産業を始めとする大量生産方式がアメリカの繁栄をもたらし、大量消費を是とする大衆社会を生み出して、都市化が急激に進展する。

1929年、ウォール街の株式大暴落によって世界大恐慌が引き起こされ、4年後に失業率はピークに達するが、さなかの1931年には大都市ニューヨークのシンボルともいえる高さ400mのエンパイア・ステート・ビルが竣工する。地下鉄ももちろん走っていたらう。作者が描くにぎやかでかつ混沌とした街は当時、目の前にあったのである。だが、建築・都市の分野からみれば、その混沌に手をこまねいていたわけでは決してない。過密都市ニューヨークのマンハッタンにはすでに広大なセントラルパークがあったし、シカゴでは作者の生まれるころに都市美運動も展開していた。巨匠フランク・ロイド・ライトが、田園の暮らしを基盤にした「ブロード・エイカー・シティ」構想を発表したのは1932年である。絵本にみる街は21世紀の私たちをも取り囲んでいるが、建築・都市にかかわる誰もが無関心であったわけではない、というのは言い訳に過ぎないだろうか？ 2000年6月、日本建築学会をはじめとする建築関連5団体が「地球環境・建築憲章」を宣言したのは、大量生産・大量消費・大量廃棄への反省があればこそである。

絵本のある紹介文に「環境のお話し。ずいぶん昔に描かれた本だけど、ちっとも古くないお話しだということが悲しい」とある。「悲しい」建築やまちづくりに荷担しないように、そして、のどかな田舎をも大切にするように、建築を学び始めるあなたの心のどこかに「ちいさいおうち」を持ち続けてほしいと願っている。

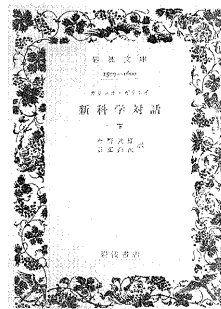
## 科学的考察の原点

和田章

東京工業大学教授

### 『新科学対話(上下巻)』

Galileo Galilei 著  
今野武雄・日田節次 訳  
岩波書店(岩波文庫)  
ISBN4003390636  
1638



数学者Leonhard Euler(1707-1783)は棒の曲げ剛性をCとおき弾性座屈荷重を求めたが、曲げモーメントを受ける断面内の応力度分布が正しく解明され、曲げ剛性Cがヤング係数Eと断面2次モーメントIの積で表せることがはっきりしたのはそのあとである。われわれは材料力学の講義の始まりに、何の役に立つかも